

「移植」と「ズレ」の思想家としての作田啓一

——思想の生成過程から考える——

片上平二郎（立教大学）

作田啓一は自身の社会学的思考の中にさまざまな思想家たちの理論を「移植」し、自らの理論を展開してきた社会学者としてある。初期のデュルケムやパーソンズ、その後のベラーやフロムといった社会学者だけに留まらず、ルソーやベルクソン、ジラール、ラカンといった社会学外の人々の思想も取り入れながら、作田は自身の思考を展開してきた。また、理論的なものだけでなく、太宰治やドストエフスキーといった文学者たちからも作田は影響を受けながら自身の思想をかたちづくっている。そのような意味で、作田啓一を「移植の社会学者」として見るのが可能であるだろう。多くの「移植」の過程によって触発されることで、彼は自身の理論をつくりだしてきた。理論の「移植」とは特殊なことではなく、あらゆる社会学者は「移植の社会学者」と言えるかもしれないが、「移植」を行った対象の幅の広さ、多様さから見ても、作田の「移植」性は群を抜いたものとしてある。

だが、同時に、他の思想家たちからの多様な影響の受け方を見ていくと、作田が彼らの思想の影響を単に一方的に受けながら思索を展開してきたわけではないことを見えてくる。作田は自身の思想に他の思想家の理論を「移植」しながらも、その理論から「こぼれ落ちるもの」に対する着目も同時に行っていく傾向を持っている。それは作田の思考の中に「移植」元とは別の「ズレ」を生み出す。『恥の文化再考』におけるベネディクトの理論から「こぼれ落ちるもの」への意識、もしくは、『ジャン・ジャック・ルソー』におけるルソーが語り落としていた水平的な人間関係への着目など、作田はある理論を徹底的に理解するとともに、そこから「こぼれ落ちるもの」をも見出し、それを考察するために、別の理論の在り方を模索するという思考の方向性を持っていた。そして、その模索はまた新たな理論の「移植」を呼び込むものともなる。その意味では、作田は「移植の社会学者」であると同時に、「ズレの社会学者」でもあった。

本報告では、作田の思想を編年的に追っていきながら、「移植の社会学者」としての彼の来歴と「ズレの社会学者」としての彼の来歴の双方を探っていきたい。この2つの要素の併存こそが、作田の思考を駆動してきたものであり、その過程を具体的に描くことは、絶えず運動し続ける作田の社会学の「生成」の過程を追うものにもなるはずだ。その際に、最初期の学説史研究からはじまり、それを応用した日本文化論的研究、移行期（ルソー論に代表される時期）、批評的な社会学という作田の研究に関する大まかな時期的な区分を用意し、その区分の中での思考の運動をまず記述するというところを行っていく。そして、その区分の中での思考の展開が、さらに大きな次の思考の変化を生み出すというかたちで作田の思考の生成を問うていきたいと考える。今回の報告では特に移行期に至るまでの過程を丹念に追っていきたい。

「移植」と「ズレ」の思想家としての作田の軌跡を見ていくことは、社会学という学問における「移植」という問題に対して、新たな視点を加えるものであるだろう。他者の理論の影響を受けることは社会学者にとって必然的であり、また必要な経験である。だが、同時にそこには当然の如く「ズレ」が伴う。「移植」という概念が社会学にとって持つ意味を考えていきたい。

参考文献

作田啓一：『価値の社会学』（1972年、岩波書店）、『恥の文化再考』（1967年、筑摩書房）
『ジャン-ジャック・ルソー』（1980年、人文書院）、『個人主義の運命』（1981年、岩波書店）